

第116回 三方限古典塾（'16. 6, 16）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 33）

- 1 晴空朗月、何れの天か翺翔すべからざらん。而るに飛蛾は独り夜燭に投ず。
清泉綠芥、何れの物か飲啄すべからざらん。而るに鷓鴣は偏に腐鼠を嗜む。
噫、世の飛蛾鷓鴣と為らざる者、幾何の人ありや。 後集 70

（意訳） 名月がかかってよく晴れた空は、広々としてどこにでも飛んでいけるはずなのに、蛾は灯火に身を投じて命を落としてしまう。清い水が湧いて緑の草が茂っていて、飲むものにも食べるものにも事欠かないはずなのに、ふくろうはわざわざ、腐ったねずみの肉だけを好んで食べている。ああ、それにしても、世間にはこのような蛾やふくろうのまねをしない者が、はたして幾人いることであろうか。

（余説） 「飛んで火に入る夏の虫」（自ら危険の中に飛び込む）という故事もあります。しかし、蛾には蛾の、ふくろうにはふくろうのそれなりの言い分があるのでしょう。それぞれで価値観は異なりますから、一概に他者を批判することはできません。「人は人、自分は自分」です。また、自分の見方や立場でしか物事が見えなくなることも要注意です。

（参考） 莊子・齊物論「毛嬙・麗姫は人の美とする所なり。魚は之を見て深く入り、鳥は之を見て高く飛び、麋鹿は之を見て決かに驟る。四者孰か天下の正色を知る。」（176p）
莊子・秋水「南方に鳥有り。其の名は鷓鴣（中略）梧桐に非ざれば止まらず、練實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲まず。是に於て鷓、腐鼠を得、鷓鴣之を過ぐ。」
（ここで、鷓・ふくろうはどのような行為をするのでしょうか？）（485p）

- 2 纒かに筏に就くや、便ち筏を捨てんことを思わば、方めて是れ無事の道人なり。
若し驢に騎りて、又復驢を覓めば、終に不了の禪師と為らん。 後集 64

（意訳） いかだに乗るやただちに、いかだを降りるときのことを考える人であってこそ、十分に悟りを開き、なにものにもとらわれない悟りを得た達人であると言える。

自分自身が既にろばに乗っていながら、その上さらにろばを探し求めるような人は、いつまでたっても悟りを得られない禪師となってしまう。

（余説） この章の意味を理解するには仏教の理解が必要です。仏教では、仏の教えは人を悟りの彼岸に渡す手段であり、その例えに筏を用い、彼岸に着いて目的を果たしたらただちに捨て去るべきものと教えます。つまり、「目的と手段を混同せず」ということです。私たちの日常においても、目的と手段を混同するようなことが多々あるかも知れません。例えば、長寿とか健康とか財産とかについてはどうでしょうか。

驢に騎りて……は、自分自身が本性として既に有している仏性（一切衆生悉有仏性）に気づかずに、他に仏性を求めるような愚かな行為ことをいっており、仏典にある言葉です。

また、仏性のみでなく、足下やごく身近にある宝物に気づかずに過ごしていることはないか、見直してみることも必要です。例えば「福は禍なきより大なるはなし」です。

（参考） 伝燈録 「即心即仏を解せざれば、真に驢に騎りて、驢を覓むるに似たり」
楞嚴經 「心外に別法なし」

（心のほかに仏なく、また仏の因なし。肝心なのは自分の心だ。是心是仏）

3 権貴は龍驤し、英雄は虎戦す。冷眼を以て之を視ば、蟻の羶に聚るが如く、蠅の血に競うが如し。是非は蜂起し、得失は蝟興す。冷情を以て之に当らば、冶の金を化するが如く、湯の雪を消すが如し。 後集 72

(意識) 権勢貴顕(勢力があり位が高い)の人々が龍のごとく権勢を争い、英雄豪傑たちは、虎のように互いに戦っている。だが、それらを冷静な目で見ると、生臭い羊の生肉にアリが群がったり、生き物の血にハエがたかたりするのと少しも変わりがない。

また、善し悪しの議論がハチの群れのようにわき起こり、損得の打算がハリネズミの毛のように盛んになされる。しかし、冷静な心でこれに対処するなら、ルツボで金を溶かしたり湯で雪を消すように、たちまち解決できるであろう。

(余説) 冷静な眼で見て冷静な心で判断すると、物事の是非や利・不利が見えてくることが多いと思われまふ。特に、第三者の眼には当事者以上に見えやすく、囲碁ではこれを「傍眼八目」と言います。物事を甲か乙かで悩み、争うのではなく、その時々によって「どちらであっても」よいことがあります。古人曰く「真実は矛盾の中にこそある」です。

(参考) 菜根譚・前集204 「冷眼もて人を観、冷耳もて語を聞き、冷情もて感に当り、冷心もて理を思う。」(2015・5)

呻吟語・応務篇「遠観するは難きに非ずして、反観するは難きとなす。」

(全体を見渡す)

(客観的に見る)

4 物欲に羈鎖せらるれば、吾が生の哀しむべきを覚え、性真に夷猶せば、吾が生の楽しむべきを覚ゆ。其の哀しむべきを知らば、則ち塵情は立ちどころに破れ、其の楽しむべきを知らば、則ち聖境も自ずから臻る。 後集 73

(意識) 物質的な欲望に繋がれ縛られていると、その人生が悲しむべきものに感じられるが、天から与えられた人間本来の性質(本性)に安んじて生きていると、自分の人生が有意義で楽しいものであると感じられる。また、物欲に縛られた人生が悲しいものであると分かれば、世俗的な執着する心はたちまちに消え去り、本性のままに生きる喜びを悟れば、自ずから聖人の境地に達することができるであろう。

(余説) 羈は、馬具の銜に結び馬の顔に横にかける装具で面懸とも言います。羈鎖で繋ぎ止める意になります。夷猶は、漢和辞典によると「ためらう、ぐずぐずする」の意ですが、上のように解釈しました。また、性真は、「楞嚴經」に見られる言葉ですが、手持ちの国語辞典と漢和辞典には見当たりません。解説本では何れも「自然の本性」と訳しています。

その「本性」とは何か、それも又難問です。「一切衆生悉有仏性」の「仏性」に近いのではと考えます。先人曰く「欲念は生れ附には一点もなく、本来は不生の仏心のみ」です。物欲に囚われると、あくせくとして人生に疲れる。「小欲知足」や「知足安分」の心境で暮らせば人生とは楽しく喜ばしいものだ、と解釈しておきましょう。

(参考) 楞嚴經「性真円融 皆如来藏 本 消滅無し」

(仏) 平等であること

新約聖書・マタイ伝・第七章「この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり」